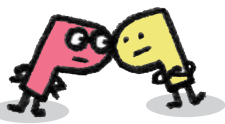


「P to P」ってなあに？



このニュースの名前にもなっている「P to P」ってなんだろう？と疑問に感じた方もいるかもしれません。発行元であるAPLAとATJでは、作る人と食べる人が交流し学び合いながら、共に支え合う関係づくりをめざして、「民衆交易」という取り組みをしています。そんな民衆交易の仲間は世界各地にたくさんいるのですが、フィリピンの仲間たちが「People to People (人から人へ)」を略して使っている言葉が「P to P」なのです。民衆交易ってなんだか堅苦しく聞こえがち……かもしれないけれど、「P to P」なら親しみやすいかなという思いもあり、この名前になりました。このニュースを通して、民衆交易の商品や生産者のご様子、普段はお伝えできない裏話など、たくさんのストーリーをお届けしていけたらと思っています。この商品について知りたい、この産地について気になる、などの皆さまからのリクエストもお待ちしています。まずはこの新しいニュースを手にとって最後まで読んでくださってありがとうございます。P to P の輪がどんどん広がりますように！

久保保み(おおくぼ・ふみ/APLA)



特定非営利活動法人APLA (Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島の20年以上の経験を活かし、「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。【HP】<http://www.apla.jp>



株式会社オルタートレード・ジャパン(ATJ)
パランゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔の見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。【HP】<http://altertrade.jp/>

P to P NEWS

人から人へ



2016.04 vol.1

特定非営利活動法人 APLA/あぶら(株)オルタートレード・ジャパン(ATJ)
〒169-0072東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F
TEL:03-5273-8160 FAX:03-5273-8667 E-mail:info@apla.jp



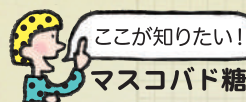
●様々なテーマでアジアならではの事情をお伝えします。

アジアの〇〇事情

パプアの食料事情

パプアの先住民族の人びとは森や海から食べものを調達しています。パラン(鉞)1本を手に森に分け入り、帰りは芋や野菜などを詰めた数十キロはする重さのノッケン(網袋)を頭に引っ掛け家路に向けてゆったり歩きます。その姿に人間の根源的な力を感じます。魚も家でその日に食べる分だけを釣ればよし。大量生産・大量消費とは真逆な、資源を必要な分だけ大切に使うパプアの暮らしが垣間見えます。

津留歴子(つる・あきこ/ATJ)



民集交易品第1号は マスコバド糖



フィリピンの砂糖生産の6割を占めていたネグロス島。1980年代前半に発生した砂糖の国際価格の暴落でネグロスの砂糖産業は壊滅状態となりました。多くのサトウキビ農園労働者が失業し、食べものを買えない状況に陥り、その家族、特に子どもたちが飢餓にさらされたのです。

1986年2月、APLAの前身団体である日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)が設立され、募金による援助活動が開始されました。しかしながら募金活動での支援は長く継続できないと考え、モノに対する対価を支払う経済活動で継続的な協力はできないだろうか、という答えにたどり着きます。土地もなく農業経験もないネグロスの人びとが何をやるかといったら、サトウキビをつくって搾ることでした。それを、「援助」ではなく協力関係によって成り立つ仕事として組み立てたのがマスコバド糖の交易でした。そして翌年、民衆交易品第1号の誕生となるのです。

幕田恵美子(まくた・えみこ/ATJ)



バラングンバナナ民衆交易の そもそもの始まり

当初は素人の手でバナナの輸入なんて無謀だ」と笑われながら、今日まで続いてきたバラングンバナナ民衆交易の始まりについて、初代オルター・トレード・ジャパン（ATOJ）社長の堀田正彦氏に話を聞きました。



キズだらけの小さな
バナナ10トンが
神戸港に着いた！



最初はネグロス島で飢餓に苦しむ子どもたちのために何ができるか、それだけでした。とにかく何か具体的な助けになることをしたかった。ネグロスの人びとからの「とりあえずカネが必要」という声を受けて募金活動から始めましたが、一方的な善意ではなく日本とネグロス双方に利益の出るような継続できる取り組みを模索したのです。そしてネグロスにはサトウキビしかないというところで、元サトウキビ労働者たちがつくったマスコバド糖の民衆交易が1987年に始まりました（詳細は「ここが知りたいマスコバド糖」を参照）。

「フィリピンと交易をしているなら、子どもたちに安心して食べさせられる無農薬のバナナは手に入らないの？」という生協のお母さんたちの声を受けて、ネグロスで入手できるあらゆるバナナを食べてみました。トルダン、ラカタン、モロード、セニョリタ、そしてバラングン。「甘いだけじゃない、その酸味が日本人好みだ！」実際に食べてみて、味で白羽の矢がたったのがバラングンという種

類のバナナだったのです。しかも地元ではそれほど消費力の高い種類のバナナではなかったことも、民衆交易にとっては重要でした。こうして、ネグロスの山間地からバラングンバナナを運び出す取り組みが始まりました。一方日本では、「バナナを輸入するための基礎調査」を命じられた生協の青果担当者が、港の通関業者や追熟加工業者の間を奔走することになります。

1989年2月、生協の青果担当者と一緒に神戸港で10トンのバナナを出迎えた時の感動は忘れられません。試験輸入したバナナは、緑色と黄色が入り混じり傷だらけでしたが、「とにかくフィリピンから日本に届いたのだ！」という事実が皆が感無量でした。港の通関業者すら、傷がいつぱいの小さなバナナを見てとても喜んでくれました。

普通のバナナでない
バナナが教えてくれた
多くのこと



それからは、ネグロスでは、バナナ生産者と現地のオルター・トレード社（ATOJ）、日本側では、ATOJ、追熟加工場（ムロ）、生協が「バラングンバナナが、美味しく食べられるバナナとして、消費者に届く」ことを実現するために力を合わせました。山間地からのバナナの収穫と運び出し、日本での加工と物流、そして黒いバナナや熟さないバナナにも理由があることを必死に説明して、追

熟のためにこたつに入れてみる、毛布をかけてみる、お風呂に入れてみる、と消費者と一緒にあれこれやってみたものです。

1990年に本格的な事業として動き出した矢先の年末には超大型台風ルピンの襲来でバラングンバナナは全滅してしまいました。台風の被害から復興するためにバラングン生産者協会（BGA）が設立され、生産者自らがつくった「バナナ村自立開発5カ年計画」の取り組みが始まりました。そして、ようやくバナナ生産が復活しかけたところで今度は「パンチートップ病害」という難題に見舞われることとなります。まさに、一難去つてまた一難です。

この当時の教訓を今も伝えてくれる石碑がネグロス島の*カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KFRCC）の中にあります。その石碑には、「クキゾウムシも悲しいのだよ」と刻まれています。どういふことが、輸出用バナナの生産により土壌が疲弊したこと、土の中のクキゾウムシがバナナの茎に入り込んで養分を吸い取るようになってしまった、その結果としてバナナに病害が発生してしまっただ、というお話です。「クキゾウムシを悲しませないように土づくりをしつかりやろう」という教訓として語り継がれています。

こんな小歴史を経て、今にいたっているバラングンバナナ。食べる側のわたしたちに色々なメッセージを届けてくれるバナナです。

まとめ* 堀田恵美子（まくと・えみこ / ATOJ）